

中学校第3学年 道徳学習指導案

- 1 主題名 思いやりの心 2-(2) 感謝・思いやり
- 2 資料名 「救われた気持ち」(阪本朋子さんへのインタビュー文・自作資料)
- 3 主題設定の理由

<p>○ ねらいとする価値について</p> <p>本主題は、学習指導要領の上では、主として他の人とのかかわりに関することの項目に位置付けられ、「温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつ。」ことを具体的な内容としている。</p> <p>近年、インターネットや携帯電話が著しく発達し、情報伝達の様相が大きく変わろうとしている。伝えたいことを伝えたいときに相手に自由に伝達できる利便性の中で、ややもすると、情報のみに目が向けられ、使い手である人への関心が薄れがちである。</p> <p>情報ツールを使う上で、送受信者はもとより、それにかかわる多くの人々の存在があることを意識させ、人と人との温かいつながりのすばらしさを考えさせたい。</p>	<p>○ 生徒の実態について</p> <p>本学級の生徒は、落ち着いた雰囲気を持ち、自分のやるべきことには真面目に取り組んでいく。ただ、自ら積極的に他者とコミュニケーションを取ることが少ないために、友人同士から得る数少ない情報を基に物事を断片的にとらえてしまい、人間関係に悩むことも多い。</p> <p>情報モラルに関する事前調査によると、自分用の携帯電話を持っている生徒が33%いた。さらに、家族と共用の携帯電話を持つ生徒も含めれば、45%の生徒が自分の使える携帯電話が身近にあることが分かった。また、使える携帯電話がない生徒の44%が、自分用の携帯電話を欲しいと願っている。今後、携帯電話の利用率はさらに高くなっていくであろう。このようなことから、携帯電話やメールでコミュニケーションを取るときも、つながりのすばらしさが大切だということを感じ取らせたい。</p>
---	---

<p>○ 資料について</p> <p>「救われた気持ち」はピアニストの阪本朋子さんが遭遇したJR福知山線の脱線事故について直接インタビューした内容を資料化したものである。</p> <p>阪本さんは、事故直後、自分のそばに落ちていた携帯電話をやむなく使う。その電話に息子を案じた母親からの電話が掛かってくる。阪本さんがその電話に出ることで新たな人間関係が生まれてくる。</p> <p>悲惨な事故の中で、親が子を思う気持ちや、携帯電話の持ち主の母親に阪本さんが直接会いに行く姿が描かれており、人と人とのつながりを強く感じさせる資料である。</p>	
---	--

<p>○ 情報モラル教育の視点</p> <p>中学校卒業後、生徒は様々な進路に進み、今までとは違った世界で生活をするようになる。携帯電話の所持率も上がり、積極的に新しい人間関係を築いていこうとする。互いに面識がないまま情報ツールで結び付いた友達同士も珍しくはない。そのような状況を前にした3年生のこの時期に、人間関係を広げていくだけではなく、人と人との個々のつながりのすばらしさを再認識し、大切にしていこうと気持ちを育てていく必要がある。</p>	
---	--

<p>○ 指導の手立て</p> <p>本資料には、2005年4月に起こったJR福知山線脱線事故での出来事が描かれている。報道等でも大きく取り上げられ、事故の記憶も新しい。また、携帯電話が話の展開に大きくかかわっており、生徒も関心をもって読み進めることができると思われる。</p> <p>導入段階では、事故に関する写真や記事を提示し、興味をもたせ、感情移入を容易にする。展開段階では、阪本さんが「母さん」という表示を見付けたとき、持ち主の母親から携帯電話を使うことを勧められたとき、持ち主に直接会いに行ったときの心情を考えさせ、母親の我が子を思う気持ちや阪本さんへの温かさ、そして阪本さん自身の人を大切に思う気持ちを感じ取らせる。終末段階では、阪本さんへのインタビューを通して人と人とのつながりを大切にした生き方について考えさせる。</p>	
---	--

- 4 本時のねらい

人と人とのつながりの大切さを理解することで、相手を思いやったコミュニケーションを取ろうとする心情を育てる。

